

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
 新宿三井ビル37F(〒160)
 TEL. (03)344-1701~3
 June. 1981 No. 14

第24回理事会開催

前年度事業報告・決算報告を承認

この6月17日、東京において第24回の理事会が開催され、昭和55年度の事業報告・決算報告が説明・審議され承認された。事務局ではこの承認を得て早速年次報告書の作成にとりかかっている。

なお、この理事会において国際部門の助成対象について審議され、選考委員会の推薦どうり4件3,432万円の助成が決定された。また「隣人をよく知ろう」翻訳出版助成についてはインドネシア2件、マレーシア1件の計3件、助成額にして598万円の翻訳費助成が決定された。

助成研究を対象に中間報告会を開催

この4月から5月にかけて延べ8日間にわたって、本年度助成対象となっている研究プロジェクトの中間報告会がもたれた。報告者のご都合で割愛した2件を除き合計93件にのぼる研究について報告され、研究者相互の間にも興味深い質疑応答が行われた。休憩時間や報告会後の懇談会でもさまざまな研究交流が計られたのではないかと思います。財団関係者にとっても大変得るところの多い会であった。この中間報告を一つのステップとしてこの11月末までにそれぞれのチームの意図する研究成果が生まれることを期待したい。(写真は特定課題研究の報告会における休憩中の討論場面。なお関連記事P.5参照。)



第6回評議員会開催

財団活動についての報告と意見交換

前記理事会に引続き、第6回の評議員会が開催された。評議員会は、役員の選任をする他、理事長の諮問に応じて必要と認める事項について助言しうる旨、「寄附行為」に定められている。現在、各方面でご活躍中の20名の方々に評議員となつていただいております。

今回の評議員会では林専務理事より昭和55年度の事業内容について報告され、また56年度の事業計画、今後の活動方針について説明され、続いて各評議員間で意見交換が行われた。

778件の申請を受理

——研究助成、公募を締切る。

4月以来2ヶ月間にわたって公募してきた本年度研究助成は、5月末日の消印をもって締切らせて頂いたが、今回は例年に較べ一段と多数の申請をいただいた。総数は778件でその内容は下表のとうりである。

申請総額は28億2,781万円にのぼり、助成予定額の2億8,000万円に対して約10倍となる。事務局では現在申請書の整理やコピーを終えたところであり、この6月末から愈々選考が始まるわけであるが、今年は選考業務も一層の困難が伴うのではないかと予想される。なお、選考結果は10月初旬に各申請者に連絡の予定である。

■昭和56年度研究助成応募状況

※1 件数下段の()内は昨年度助成件数を示す。
 ※2 申請額下段の()内は助成予定額を示す。

項目	申請状況		
	件数	申請額	申請額/件数
研究助成内訳	交通安全、生活・自然環境領域 (32件)*	11億0,643万円 (1億0,500万円)*	万円/件 420
	社会福祉領域 (25件)	6億3,889万円 (6,300万円)	" 375
	教育・文化領域 (21件)	7億9,056万円 (7,700万円)	" 326
	特定課題研究 (17件)	2億9,193万円 (3,500万円)	" 283
研究助成合計	778件 (95件)	28億2,781万円 (2億8,000万円)	万円/件 363



東南アジア便り

国際部門・プログラムオフィサー
岩本一恵

○ビルマ：現代文学

当財団の「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成では、今年からビルマの作品の紹介を行うことになった。募集対象となっている12冊の本の作者のうち、半数の人々に会う機会があったので、作家達の声をヒアリング・メモから少し紹介してみたい。

「過去に私も他の作家も書かなかった題材とテーマを取り上げて、ビルマ人がどのように今を生活しているかを読者に伝えることにしている。物事を違う視点から見ると違う顔が見えるものだ、ということを読者の前に写真を見せるように展開させていく。真実は概して醜い顔をしているものである。」 「ビルマでは女性の立場は不遇である。どこにも身の置き所のない女性の姿を実際の出来事に基いて書くとともに、売春以外に簡単に生計を立てる道が無くてもその誘惑に負けず、低い賃金の正業に就いて懸命に働く女性の姿を書いた。貧しくても悪環境でも自分の事は自分でコントロールする強さを持つと、と読者に呼びかけてきた。」 「ビルマの農民、労働者、中流の人々の人生との闘い、愛、希望、失望等を書いて来た。封建制への反対、外国によるビルマ支配への抵抗、労働者階級から、学ぶべきこと等を主題にしてきた。」 「中流家庭を舞台に、青年達の日常や家庭の問題等を書いてきた。今後書きたいのは、子供を生む時の母親の気持である。」 「1938年から61年までの間の国家主義の高揚を、外国による植民地支配へのナショナリスト達の抵抗と恋愛を中心に書いたが、これは5版を重ねた。」 「人生とは何なのかを知りたい。自分は1932年教師の息子として生れたが、8才の時に父親に死別れ、その後母親をビルマの少年僧（ランゲーン）



助け弟妹を養うために、野菜や茶を売って貧困と闘いながら成人した。その16才までの自伝を書いた。」等々。

なお、他の東南アジア諸国もビルマ文学には強い関心を寄せており、東南アジアの文学ジャーナルに作品を載せたい、あるいは英訳を出版したいという声があるので当財団が持っている情報は提供をして、役立てていただくことにしている。

○タイ：寺院壁画

タイの仏教寺院の内部に描かれた壁画は、美術としてもまた、描かれた当時の社会風俗を伝える歴史資料としても重要な文化遺産である。しかしこれらの壁画は、雨が吹き込んだり、日光が差し込んだり、床から湿気が上昇して来たりするために、消えたり崩れたりしてしまい失われていく傾向にある。また一方、寺を改築する時に僧侶や村人は、バンコクの現代風の壁画に好んで塗り替えてしまうことも多い。このような状況に対してタイの芸術局は、壁画に樹脂を塗り被せて湿気を防ぐという対症療法で急場をしのぐ一方、フォード財団やICCROMの援助を得て保存技術者の養成に手をつけたりしているが、本格的な保存計画の検討にまでは至っていない。

当財団はこの数年間、北部タイの寺院壁画を記録し分析する研究、壁画の顔料や基礎を化学的に分析して壁画保存方法を検討する研究、に助成を行ってきた。そして、本年3月には、タイのシルパコン大学（芸術大学）と芸術局との共同プロジェクトへの助成を決定した。このプロジェクトは、建築、化学、建築工学、生物学、美術史、保存技術の分野の専門家が協力し、しかもシルパコン大学と芸術局の職員および日本の東京芸術大学の助教授が参加するもので、参加者はそれぞれ寺院建築および壁画にかかわってきた経歴を持つ。取組む対象は、バンコク郊外にあるワット・チョン・ノンシというバンコク地域では最も古い200年前に建てられた寺院で、アユタヤ様式の末期のものである。この寺の壁画の保存を、上述の6つの分野から検討し、壁画保存のための調査および保存計画作成のモデル・ケースにしようとするのがこのプロジェクトのねらいである。

来年'82年はバンコク創設200周年記念の年であるが、当財団の助成対象となっているタイ北部の寺院壁画研究の成果が、写真の巡回展示会、出版物という形で発表され、記念祭の行事の一つとなる予定である。また、ワット



ト・チョン・ノンシ・プロジェクトの成果の一部およびプロジェクト活動を記録したスライドや写真等も発表されることになる。このプロジェクトは調査の準備を開始したばかりであるが、そのインパクトとして既に、シルパコン大学の修士コースに、壁画保存講座、タイ建築保存講座を開こうとする動きが出てきている。

○インドネシア：日本への関心

東南アジア向け「隣人をよく知ろう」プログラムを準備するに当たって、インドネシアの人々が日本のどのような書物に関心を示しているかについてのヒアリングを行った。学者、ジャーナリスト、出版関係者等の意見を聞いてみたところ、次のように幾つかの分野に関心が収斂することがわかった。

まず、日本がいかにアイデンティティを保ちながら近代化を進めて来たかがわかるような著作が欲しい。つまり、過去の社会的特徴や文化を壊さずに、無理なく社会変化をしながら近代化をいかに進めて来たか、その失敗も成功も知りたい。

次に、日本の経済成長の秘密、日本の経営、労使関係、それらの基盤になる日本人の行動様式、組織づくり。これらについては理論と実例の両方が欲しい。

第3に、その他。日本についての一般的知識、文学、日本人学者による東南アジア研究の成果、等。

インドネシアでは現在、日本を知ろうとする日本ブームが起りつつある。西欧の行き方とは異った日本の行き方から、よりインドネシアにふさわしい開発のあり方へのヒントを引出そうとしていると言えよう。

○マレーシア：待たれるマレーシア文学の日本人翻訳者の出現

マレーシアの人々は「隣人をよく知ろう」プログラムに大変協力的で、募集対象となった本が訳されるのを心待ちにしている。日本の出版社も努力を傾けて出版を計画しているが、問題は日本人翻訳者が手薄なことである。インドネシアの文学作品を翻訳できる日本人専門家の数は少なくない。ところがマレーシア文学を翻訳しようと名乗り出る専門家は少ない。インドネシア語に秀でている専門家で今後はマレーシア語とマレーシアを研究してみようという方はおられないものだろうか。そのような方が現われた場合には、マレーシア側は第一線で活躍中

のマレーシアの作家への紹介や、その方がマレーシアに來られた時に、農村滞在等の体験の機会を提供する、などの便宜をはかることを約束してくれている。まさに、日本-マレーシア交流の橋をかけるパイオニアの出現が待たれているわけで、読者の皆様からも関係者に口コミをお願いしたい。

さて話かわって、当財団は、マレーシアの青少年のための教育雑誌の発行に助成を行っているが、その第1号が5月1日にお目見えした。なかなか質の高い月刊誌である。マレーシア社会に良いインパクトを与えることを願うものである。

○シンガポール：文化財団の翻訳プログラム

シンガポール文化省はシンガポール文化財団を設立して、シンガポール人作家への奨励、翻訳プログラム、地元のパブリッシャーにとってリスクが大き過ぎる芸術雑誌の発行などを開始した。翻訳プログラムは、ナショナル・ブック・ディヴェロプメント・カウンスルとの共同事業で、4種類あるシンガポールの国語間の翻訳（例えば英語の作品を、中国語、マレー語、タミール語に訳す）プログラムである。この翻訳プログラムには思いがけなく、当財団の「隣人をよく知ろう」プログラムも小さな貢献（日本人もシンガポールの作品を翻訳するプログラムを既に始めているのだから、シンガポールでもシンガポールの国語間の翻訳を行うべきである、と考える刺激を与えた）をしているそうである。ちなみに、Son of Singapore やIf We Dream Too Longなどは、当財団のリストにもシンガポール文化財団のリストにも入っている。

ワット・チョン・ノンシ (バンコク郊外)





助成刊行物紹介「隣人をよく知ろう」プログラム

「マレーシアの社会と文化」-マレー人の伝統と近代化-
 ザイナル・クリン編 鈴木佑司訳
 井村文化事業社刊(マレーシア叢書社会科学編1) A5 322頁 2,000円

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成の対象となった本書は、マラヤ大学のマレー人学者9人が、自分の属するマレー人の社会について、マレー語で書いたかなり専門的な学術研究書の全訳である。

本書の特徴は、編者ザイナル・クリンが序言で述べているように、執筆者全員がマレー社会の一員としての自覚を持って、研究のための知識と科学的思考方法は西欧に学びつつも、その精神において西欧流の東方学研究者の真似に終わらず、社会の一員たる主体的な関心を持って自らの社会を調査分析しようとする姿勢にあると言える。言い換えれば、科学的客観的に分析するだけでなく、「内側の人間」の価値観に基づいて、批判的分析を行おうとする姿勢である。このことは、通常英語で書かれる学術論文をマレー語で書き、マレー語が学術用語として通用することを示そうという彼らの意気込みにもな

第2回国際活動アドバイザー会議から

当財団の国際活動にアドバイスをいただく第2回アドバイザー会議が4月3日に開かれた。

今回、主として議論が展開された事柄は、東南アジア向け「隣人をよく知ろう」プログラム、国際助成活動の意義とそれに対する社会からの認識、国際助成プログラムの評価はどうあるべきか、であった。

東南アジア向け「隣人をよく知ろう」プログラムとは、日本人の著作を、東南アジアに紹介するプログラムである。日本側からの押しつけにならないように、また、プログラムの枠組が硬直的にならないよう注意をすべきである。日本人の著作としては、社会科学書、文学、東南アジア研究の成果、が考慮の対象となり、東南アジアにおける読者としては、学者、学生、一般庶民が想定される。

民間非営利部門(第3セクター)の活動については社会からの理解がなかなかされにくいという状況が現状であろうが、息の長い努力を続けて行くことが重要である。

国際助成にあたっては、何のために助成をするのかという問いを常に持っているべきである。助成を行うこと

って表われている。

本書は9章からなり、各章は執筆者各人の学術論文で、各論文のテーマは、第1章-呪術の世界-マレー文化と世界観、第2章-マレーシアのポンドク、第3章-マレー村落の家族構造と組織、第4章-村落に於ける政治意識の構造、第5章-イギリス植民統治とマレー経済、第6章-マレー経済の停滞性、第7章-村落経済と消費生活に関する一考察、第8章-都市のカンボンに於ける社会関係、第9章-国土開発公社開拓村に見る開発政策の挑戦とその問題点-ケダ州ティアン川地域の公社計画事業の一考察、である。

マレーシアはこれまで、マレー人、中国人、インド人等が独自に社会を形成し、全体として複合社会を成していると言われてきた。しかし、近来、マレーシアの政治、経済、文化等のあらゆる領域へのマレー人の進出が著しく、いわゆる「マレー化」が進んでいる。マレーシアの今後の方向を決める重要な要素となっている、マレー社会の枠組、マレー人の物の見方、考え方を知る上で、本書は格好の書物と言えよう。(牧田記)

でそれが対象者による個人的利権化を生むことのないよう注意すべきである。以上のような意見が出された。

(岩本記)

日本向け「隣人をよく知ろう」
 プログラムで既に刊行された本





中間報告会を聞いて感じたこと

国内部門・プログラムオフィサー
山岡義典

4月末から5月末にかけて述べ8日間にわたり下記のように助成研究についての中間報告会がもたれた。

- ・交通・環境領域 4月17(金), 18(土)日 於私学会館
- ・社会福祉領域 5月11(月), 12(火)日 於上智会館
- ・教育・文化領域 5月15(金), 16(土)日 於私学会館
- ・特定課題研究 5月22(金), 23(土)日 於上智会館

3領域1特定課題の合件93件についての報告が行われたわけであるが、このような会をもったのは初めての機会でもあり、私共も随分戸惑うことも多かったが、何よりもご報告いただいた研究者の方々には大層ご迷惑をおかけしたのではないかと心苦しく思う。改めてお詫びを申しあげたい。

多分野・多方面に亘る内容のあるご報告を20分ずつ次々に聴き続けていると、実際のところ頭が朦朧としてくることもあって、報告会を終ると大変疲れるのではあるが、それでも助成研究の全体像を鳥瞰的に見通すことの出来た点は非常に良かったと思う。従来のように個別に時間をかけてインタビューにうかがったり研究会に出席させて頂くやり方は、それなりに密度の高い理解や意見交換を可能とするので今後とも可能な限り続けていきたいとは思いますが、今回のようにまとめてお聞きすると又別の認識も得られるようである。中間報告会は是非来年度からも続けさせて頂きたいと思う。

以下には8日間の報告を通して感じたことについての個人的な感想を順不同で述べさせていただきます。

●何に挑戦しようとしているのか

やはり研究プロジェクトというものはこれが明確でなければいけないのではなからうか。特に共同研究の場合は共同者全員がこの点についての共通の理解をもつことが必要であろう。選考に当たってもこの点は十分論議しているつもりではあるが、今回ご報告いただいた中にもどうもこの点のはっきりしないというか、未確認のままと思われるものもあったようである。

●予備的研究の重要性

上記の点とも関連するが、最初から本研究に入ったものの中には、もう少し予備研究として十分論議を尽くし、方法を煮つめておくべきではなかったかなと感じるもの

もいくつかあった。個々に各研究者は類似テーマの研究蓄積はもっておられるとしても、新たなプロジェクトに着手する場合にはそれなりの初心に立ち返った再検討が必要ではないだろうか。逆に予備的研究で1年間じっくりと検討を続けてきたプロジェクトや、数年にわたってコツコツと足場を固めてきたプロジェクトについては言い難い迫力を感じるものがあった。なお本年度予備的研究として進めているものの中には実に自由な発想で試行錯誤の検討を重ねているものもあり、それらは次年度以降の本研究への展開が楽しみでもある。

●ホットな実践とクールな論理

すべての研究についてという訳ではないが、生活環境の問題や社会福祉の問題、教育の問題を扱う場合には現場からの発想を組みこむことが不可欠ではなからうか。現場の悩みや痛み、いわばそういう生活感覚というものを捨象して抽象的な論理操作だけから何かを言おうとしても、学術的な興味は別として、少なくとも先に掲げたような問題の解決にはどのように寄与し得るのか疑問に思う。逆に現場中心の実践的研究の場合には、個別状況に余りに没入しすぎて普遍化し得る成果を得られないのではないかという危惧を感じるものもある。それは事業助成としての意味はあっても研究助成として考えると問題であろう。現場の悩み・痛みを体験的に理解していくようなホットな実践と、問題の所在や解決の糸口を冷静に客観視して整理していくようなクールな論理と、この両者がガップリ四つに組んだような研究が理想であろう。そのような研究もいくつか見受けられ、それぞれに相当のご苦勞をされておられるようで頭の下る思いであった。

●民間財団の助成にふさわしい研究とは

毎年選考にあたっては「優れた研究よりもふさわしい研究を」と選考委員の先生方をお願いしている。しかし何が「ふさわしい」かの具体的なイメージが当初からあった訳ではない。6年間の活動はそれを模索するプロセスであったが、今回一同にご報告いただき、いくらか明確になったような気がする。一言で言えばそれは従来の制度的ワク組の中にあっては発想し得ないような、また発想し得てもそのワク組みの中では実施が困難なような、そういう研究を促進することではないかと思う。硬直し兼ねない制度・体制に具体的な形で新鮮な血を注ぎこむような、そのような研究活動をこそ民間助成財団は育てていくべきではないかと感じたのである。



活動報告

助成研究報告会

●第11回報告会

テーマ：「地域社会に根ざした保健・医療を考える」

日時：昭和56年3月28日(土) 1:00～6:00P.M.

場所：東京都港区六本木 国際文化会館講堂

プログラム：

研究報告—保健医療における地域性—

(序) 日本の高齢化社会における医療と福祉に関するシステム分析

青山学院大学経済学部教授 高森 寛

(1) 世帯における社会保障費負担と給付額との対応に関する研究

お茶の水女子大学家政学部教授 伊藤 秋子

千葉大学教育学部講師 宮本みち子

(2) 大規模病院の新設が無医村地域の医療圏形成に及ぼす影響

琉球大学保健学部助教授 崎原 盛造

(3) 保健福祉の町づくりに関する調査研究

東京大学医学部助教授 園田 恭一

秋田県合川町保健課保健婦 秋林 英子

(4) 英国の総合保健サービスにおける医師・保健婦・看護婦の相互協力援助体制の実情に関する調査研究

大阪大学医学部教授 朝倉新太郎

大阪大学医学部講師 多田羅浩三

質疑及び関連討論

司会 厚生省病院管理研究所長 佐分利輝彦

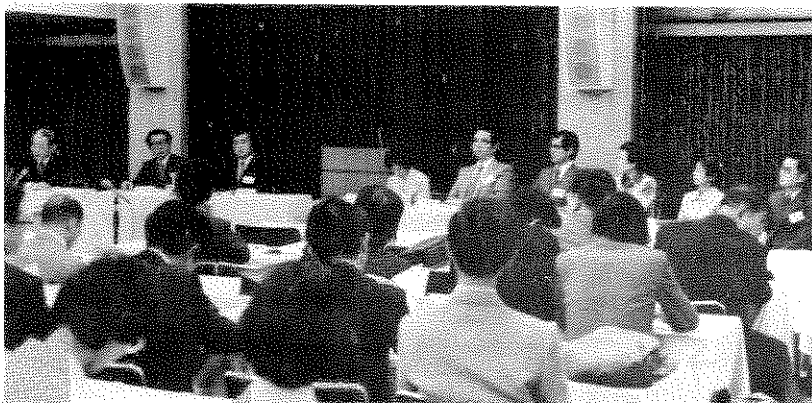
討論者：左より佐分利、朝倉、多田羅、秋林、園田、崎原、宮本伊藤、高森の各氏

現在の医療においては、設備や技術等のハード面では著しい進歩がみられるが、国民健康保険を初めとする各種の医療保障制度や施設の立地・機能等のソフト面では必ずしも充分とはいえないのではないかとと思われる。近年、国民医療費の増大、高齢化社会への移行に伴い、身近な医療の充実が叫ばれている中、地域の特性を考慮し、住民や患者の立場に立った保健・医療計画の策定が今後益々望まれるところである。

去る3月末に開かれたこの報告会では、以上の点に鑑み、左記の通り報告と討論が行われた。先づ研究報告(序)は、人口動態予測モデルに基づき、わが国の人口高齢化の様相を数量的に把握することにより、今後の医療需要及びその決定要因を予測しようとしたもので、他の報告に先立ち、総合的な観点から医療・福祉システム計画の課題が論じられた。続く研究報告(1)は、国民健康保険に関して、その加入世帯の支払う保険料と受け取る医療給付額との対応関係を明らかにしようとしたものであり、岩手県一戸町と長崎県西彼町及び静岡県掛川市とを比較した調査結果が報告された。研究報告(2)では、沖縄県南部地区における大規模病院の新設が、同地区の医療圏形成にどのような影響を及ぼし、また地区住民の受療行動パターンをどの様に変えていったのかという点についての追跡調査報告が行われた。研究報告(3)では、昭和53年から10ヶ年計画で「保健福祉の町づくり」に取り組んでいる秋田県合川町を対象とした住民の受診率向上のための方策や健康に関する意識についての調査報告が行われたが、更に自治体としての施策面に関する報告もなされた。最後の研究報告(4)では、地域医療発祥の地と言われる英国におけるヘルスセンターやグループプラクティス診療所等の訪問調査から得られた保健スタッフの日常活動内容及びチーム・ケアの成立基盤について報告された。

以上の報告に基づき、後半ではフロアの参加者も交えて活発な質疑・討論が展開されたが、中でも英国での事例をめぐり、地域社会と密着した保健サービスのあり方について賛否両面の意見が出され、今後の地域医療を考えていく上での貴重な示唆が与えられた。

以上の報告に基づき、後半ではフロアの参加者も交えて活発な質疑・討論が展開されたが、中でも英国での事例をめぐり、地域社会と密着した保健サービスのあり方について賛否両面の意見が出され、今後の地域医療を考えていく上での貴重な示唆が与えられた。





〔成果発表等助成〕助成対象から

増えてきた国際学会での発表

研究成果というものは、それがどんなに優れたものであっても、誰でもが見聞きすることが出来るようになり、それによって様々な人の心にインパクトを与えるようになれば社会的な財産になったとは言えない。ある場合にはそのために長年月かかることもあるし、ある場合には成果が出次第一時も早く公表する必要がある。

トヨタ財団では、研究助成による成果を研究者独自によって社会化していただくことを目的に「成果発表等助成」の制度を設けている。これは研究報告書の印刷費、研究成果の発表を主内容とした出版物の刊行費、研究成果の発表を主内容としたシンポジウム等の集会開催費、国際的な学術研究集会において研究成果を発表するために必要な費用、その他上記各項目と関連して必要な費用、の5項目を対象としており、本年度は3000万円の予算を計上している。

研究助成による研究蓄積が増えるにつれ、成果発表に関する申請も増える傾向にあるが、特に最近では国際学会への発表が増えている。本年2月と6月の選考結果から助成対象を項目別に紹介すると次のとおりである。

イ. 研究報告書の印刷費

- ・清成忠男 300,000円「ムラづくりの系譜と展望」の研究報告書印刷
- ・細江達郎 398,000円「下北半島出身者の職業的社会化過程についての再追跡調査研究」初年度調査資料の印刷
- ・志水隆一 1,200,000円「大気中の重金属微粒子の極表面組成分析による都市大気汚染の新しい評価方法の開発」により作成したデータ・ブックの印刷
- ・高坂正堯 853,000円「高度産業国家における福祉政策の決定過程の比較研究」報告書の印刷
- ・四手井綱英 2,730,000円「森林環境に対する住民意識の国際比較に関する研究」報告書の印刷

ロ. 出版物の刊行費

- ・升味準之輔 6,939,000円「戦前期日本官僚制の制度・組織・人事」に関する研究成果を東大出版会より同名(仮題)の出版物として刊行するための助成

ハ. シンポジウム開催費

- ・清成忠男 1,030,000円「ムラづくりの系譜と展望」に

ついでに研究成果発表を中心に、大分県大田村にて地元を交えたシンポジウムを開催(7月26日予定)

- ・宮田 彬 440,000円「誘蛾灯により採集された蛾類をbio-indicatorとして開発に伴う自然環境の変化を量的に捕捉する試み」の研究成果発表を中心に、大分県湯布院にて、九州の自然環境と昆虫相をテーマとしたシンポジウムを開催(7月4日予定)
- ・玉野井芳郎 3,150,000円「戦後の沖縄地域における水利用と土地利用に関する総合的研究」の成果発表を兼ねて、沖縄と東京にて、台湾と沖縄の水利用開発についての国際シンポジウムを開催(沖縄:7月27,28日,東京:7月31日,8月1日)

ニ. 国際学会出席費

- ・堀 輝三 1,500,000円「赤潮構成微小鞭毛藻の基礎生物学的研究」の成果の一部を第13回国際植物学会議(8月21~28日於シドニー)にて発表(2名出席)
- ・安元 健 780,000円「シガテラ毒化原因鞭毛藻の生育環境および栄養要求に関する研究」の成果の一部を第31回純正応用化学国際連合会(IUPAC)海産有毒物部会(8月25日~9月2日,於ブラッセル)にて発表
- ・角皆静男 970,000円「大気中の化学物質の輸送および除去機構に関する研究」の成果の一部を国際気象学・大気物理学連合(IAMAP)の「大気化学と地球規模の汚染に関する部会」(8月17~28日,於ハンブルグ)にて発表
- ・古川宇一 900,000円「心身障害者の地域福祉に関する実践的研究」の成果の一部を第8回国際遊び場協会(IPA)世界会議(8月23~28日,於ロッテルダム)にて発表
- ・青井和夫 1,770,000円「定年制問題への個人的対応と社会的対応」に関する研究成果の一部を第12回国際老年学会の「定年への適応部会」にて発表(2名出席)
- ・富永 健 550,000円「大気中の極微量有機ハロゲン化合物の分析ならびにその地球環境における挙動に関する研究」の成果の一部をアメリカ化学会年次大会の環境化学部門(8月23~28日,於ニューヨーク)にて発表

ホ. その他関連事項

- ・前嶋信次 880,000円「日本・アラブの相互認識に関する研究」で作成・出版した文献リストの一部買上げ(山岡記)



報告書の発行予定

●昭和55年度年次報告は7月発行

55年度年報(和文)は7月末ごろ完成予定です。本レポートの登録者にはお送りいたします。未登録の方でご希望の方はおハガキにてお申し込み下さい。

●「街と建物—明治・大正・昭和」の報告書は7月発行

財団設立5周年記念事業の一つとして行った表記タイトルの全国巡回報告会の概要をまとめた報告書を現在作成中です。当初3月中に完成を予定しておりましたが大幅におくれご迷惑をおかけしています。7月末ごろには完成いたしますので既にお申し込みいただいた方は今しばらくお待ち下さい。なお新たにご希望の方はおハガキにてお申し込み下さい。

▽“身近な環境を見つめよう”研究コンクール
この秋から第2回公募

前号でお知らせしましたように、財団設立5周年記念事業としてスタートした表記コンクールは、今後2年毎に公募を行うことになり、次回公募をこの秋から開始するため現在事務局ではその準備にとり組んでおります。次回コンクールの概要は下記のとおりです。

- 主旨：専門の研究者と地元の関係者との共同による日常生活圏を対象とした研究活動を促進し、生活と密着した「身近な環境科学」の発展に寄与する。
- 公募期間：本年10月15日より57年1月15日まで(予定)
- 応募方法：財団指定の応募用紙にてご応募下さい。応募用紙の請求は10月10日以降官製ハガキにて財団研究コンクール係宛にお願いします。

なお、公募期間中に第1回研究コンクール・研究奨励賞受賞チームの中間研究報告会を公開で実施いたします。日時等詳細は次号財団レポートにてお知らせいたします。

トヨタ財団事務局長相田岩夫氏・急逝

当財団設立以来6年半にわたって事務局長の任にありました相田岩夫氏は、6月20日未明、急性心不全のため逝去されました。事務局員一同、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

なお、6月21日に新宿太宗寺にて葬儀を執り行いましたが、関係各位の多数の方にご参列いただき、厚く御礼申し上げます。

助成研究報告会レジュメ

最近作成した助成研究報告会レジュメで下記のものに余部があります。ご希望の方はハガキにてレポート係までお申し込み下さい。無料でお送りいたします。

- 第10回「環境問題への社会科学的アプローチ—海岸開発と海域保全をテーマとして—」
- 第11回「地域社会に根ざした保健医療を考える」
- 第12回「海外の日本人とその子供達—アメリカと東南アジアの在留邦人の生活を通して—」

編集後記

▶本年度研究助成は5月31日〆切となりましたが、皆様方からは総計778件にのぼるご申請をいただきました。

▶申請書の第1号は4月末に到着しましたが、これは例外的に早いケースで大半は5月最後の週に集中します。ことに6月1日と2日の受信分が約500件で全体の6割を越えました。

▶財団事務局ではこれだけの数の申請を5月末から約3週間かかって選考委員会にかけられるように整理します。まず受信簿に記入した申請を開封し領域分類等を確認した上で登録番号を付し、申請一覧表に書き込みます。そして申請者及び大学事務宛受付通知を発送します。それから選考委員に配布するため申請書のコピーを作るのですが、(8ページ×件数×担当する選考委員の数)でおよそ4万6千枚。これに一覧表のコピー等をあわせると約5万枚のコピーをとることになります。

▶1日平均4人のアルバイトを動員し、複写機もフル回転したわけですが、この間にも申請された方からお電話で、記入内容の訂正依頼などがしばしばありました。しかし上のような状態でもとても対応しきれないためお断りさせていただいたこともございます。悪しからずご容赦下さい。

▶レポート編集最後の段階で悲しい訃報を掲載することになりました。悲しみを乗り越えて一層充実した財団活動に邁進することが、亡き局長の遺志に報いる最良の道ではないかと事務局員一同決意を新たにしております。

トヨタ財団レポート No.14

発行日 昭和56年6月30日

編集発行 財団法人 トヨタ財団

(担当 久須美雅昭)

印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。